

第193回 令和8年3月12日(木)

「心のドアが開いているとき。」

携帯電話で会話するとき、相手の電源がオフになっていると「お客様の携帯は電源がオフになっているか、電波の届かないところに…」という無機質なアナウンスが聞こえます。

会話が成立するためには発信側と受信側の双方がスタンバイできている必要があります。受信側が切れていればいくら話しても相手には伝わりません。

家の中に話したい相手がいて、ドアのチャイムを鳴らしても出てこない。このようなとき、ドアをノックしようとするかもしれません。場合によっては大きな声で名前を呼ぶかも。そのときにあなたが家の中にいたとしたらどう感じますか。出ていくのが怖くなりませんか。

相手の話を聞きたくないとき、心の中のドアが閉じてしまいます。それを無理にこじ開けようとしても逆効果です。反対に奥のほうに行ってもさらに閉じてしまうだけです。

無理やりカギを開けたらどうなるでしょう。その時は黙って聞いているかもしれませんが、閉ざされた心は元に戻らなくなります。

教師をしているとこのような場面を頻繁に体験することになります。こちらに反抗している場合や何かがひっかかっている場合など、原因はいろいろありますが、先生の話は今聞きたくありません、という気持ちが態度に現れることがあります。

若いときはここで甘い顔を見せると良くないと思い強い言葉がけをしたこともありますが、いまは時間に解決してもらおうことを考えます。

ほとんどの場合受信側の気持ちが整っていなければ伝わるものも伝わりません。

時間がたつと外の気配に興味をわいてそっとドアを開けて外を見てみたくなるものです。人間は永遠に孤独で生きていけるほど強くないと思います。

このような気づきを「待つ」という余裕は経験がないとなかなか使うことができません。強い言葉で叱責してしまうこともあるかもしれませんが、大きな声を出してドアを強くノックしているのとかわりません。

特に小さな子どもは幼少期に怖い思いをするとトラウマになってしまいます。焦らず、怒らず、ドアが開くまで待ち続けます。関係の質が整わないうちに力で解決しようとするとうまく修正できなくなります。待つことも大事な教育の手段だと考えています。